生死事大（しょうじじだい）　　H21.12.23

生死事大とは、生き死の問題は重大であって、それをいかに超越するかが最大事であることです。生死を繰り返す、この世の迷いを捨てて悟りを開くことは、いま生きているこの時しかなくて、最も大切なことであるといいます。生死事大は仏教、特に禅宗の語です。

禅宗の僧堂では、毎日欠かすことなく、朝夕の時を告げたり、法要の知らせとして木板（もっぱん）と言う法具を撃ち鳴らします。この木板の表には「生死事大」の墨書があり、仏教者としての真実を求める最重要課題である生死の問題を明らかにすべき事を投げかけられています。

道元禅師の主著「正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）」の抄録（しょうろく）ともいえる「修証義（しゅうしょうぎ）」の最初に「生（しょう）を明らめ死を明むるは仏家一大事の因縁（いんねん）なり、生死（しょうじ）の中に仏あれば生死なし、ただ生死即ち涅槃と心得て、生死として厭（あ）うべきもなく、涅槃として欣う（ねがう）べきもなし、是（こ）の時初めて生死を離るる分あり、唯一大事の因縁と究尽（きゅうじん）すべし」とあります。

生死の問題は人生そのものの一大の命題であり、生死を明らかにすることは、すなわち迷い、煩悩を超脱し悟りの境地そのものを築くことに他ならないのです。

生とは何か、死とは何か、人間如何（いか）に生きるべきか、その究明こそ人として最も大事な課題なのです。だからこそ、その究明に時間を惜しんで修行すべきだと言う激励の言葉として「生死事大」の語があり、その語に続く言葉として「光陰可惜」（こういんおしむべし）があり、さらに「無常迅速　時人不待」（むじょうじんそく　ときひとをまたず）の語がつづくのです。

朱子学で知られる朱喜（しゅき）の「少年易老学難成　一寸光陰不可軽」（少年、老いやすく、学なり難し、一寸の光陰　軽んず可からず）の句は有名である。また詩聖・陶淵明（とうえんめい）の「歳月不待人」（歳月、人を待たず）の語がその句と一つに重なり、織りなして、生死事大　光陰可惜無常迅速　時人不待の語となり、禅門では今も大事な言葉として、修行者を木板のコーン、コーンの響きを通して朝晩、策励（さくれい）し続けているのです。

生まれて死ぬ一度の人生をどう生きるか、それが仏法の根本問題です。長生きすることが幸せでしょうか。そうでもありません。短命で死ぬのが不幸でしょうか。そうでもありません。問題はどう生きるかなのです。この世において、生まれたものは死に会ったものは別れ、持ったものは失い、作ったものはこわれます。時は矢のように去っていきます。すべてが「無常」です。無常ならざるものはあるでしょうか。

平成２１年１０月２６日の第１７３回国会における鳩山内閣総理大臣所信表明演説

三　「居場所と出番」のある社会、「支え合って生きていく日本」　（人の笑顔がわが歓び）　H21.12.19

先日、訪問させていただいたあるチョーク工場のお話を申し上げます。

創業者である社長は、昭和三十四年の秋に、近所の養護学校の先生から頼まれて二人の卒業生を仮採用しました。毎日昼食のベルが鳴っても仕事をやめない二人に、女性工員たちは「彼女たちは私たちの娘みたいなもの。私たちが面倒みるから就職させてやってください」と懇願したそうです。そして、次の年も、また次の年も、養護学校からの採用が続きました。

ある年、とある会でお寺のご住職が、その社長の隣に座られました。

社長はご住職に質問しました。

「文字も数も読めない子どもたちです。施設にいた方がきっと幸せなのに、なぜ満員電車に揺られながら毎日遅れもせずに来て、一生懸命働くのでしょう？」

ご住職はこうおっしゃったそうです。

「ものやお金があれば幸せだと思いますか。」続いて、

「人間の究極の幸せは四つです。

愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされること。

働くことによって愛以外の三つの幸せが得られるのです。」

「その愛も一生懸命働くことによって得られるものだと思う」､これは社長の実体験を踏まえた感想です。

このチョーク工場は、従業員のうち七割が「障がい」という「試練」を与えられた、いわば「チャレンジド」の方々によって構成されていますが、粉の飛びにくい、いわゆるダストレスチョークでは、全国的に有名なリーディングカンパニーになっているそうです。障がいを持った方たちも、あるいは高齢者も、難病の患者さんも、人間は、人に評価され、感謝され、必要とされてこそ幸せを感じるということを、この逸話は物語っているのではないでしょうか。

私が尊敬するアインシュタイン博士も、次のように述べています。

「人は他人のために存在する。何よりもまず、その人の笑顔や喜びがそのまま自分の幸せである人たちのために。そして、共感という絆で結ばれている無数にいる見知らぬ人たちのために。」

周利槃特（しゅりはんどく）愚路とも呼ばれた。　　H21,11,23

茗荷（みょうが）の名前の元になったお坊さんは、周利槃特（しゅりはんどく）という。周利槃特は、天竺（インド）の北部に生を受け、兄の摩河槃特（まかはんどく）と共にお釈迦様に弟子入りした。兄は賢く、お釈迦様の教えをよく理解し、深く仏教に帰依したが、弟の周利槃特は物覚えが悪く、自分の名前すら覚えられなかった。そのため、托鉢に出かけても、お釈迦様の弟子として認められず、乞食坊主扱いをされ、お布施を貰うことが出来ない。お釈迦様はこれを憐れみ、「周利槃特」と書いたのぼりをこしらえて「明日からこれを背負って托鉢に行きなさい。もし名前をたずねられたら、これでございますと、のぼりを指差しなさい。」といわれた。次の日から托鉢の時にのぼりを背負っていくと、人々はお釈迦様の書かれたのぼりをありがたがり、たいそうなお布施をいただくことができるようになったそうである。

さて、兄は、物覚えの悪い弟に、何とかお釈迦様の教えを覚えさせようと手を尽くしてやるが、弟の方は、朝に覚えていたものを昼には忘れてしまう。周利槃特は、自分のおろかさに涙を流して途方にくれた。それを見ていたお釈迦様は「自分が愚かであると気づいている人は、知恵のある人です。自分の愚かさを気づかないのが、本当の愚か者です。」といわれ、ほうきを周利槃特に渡して「ごみを払おう、あかを除こう」と唱えて掃除をしなさいと教えた。

その日から周利槃特は、雨の日も、風の日も、暑い日も、寒い日も、毎日「ごみを払おう、ちりを除こう」と唱えながら掃除をし続けた。やがて「おろか者の周利槃特」と呼ぶ人はいなくなり、「ほうきの周利槃特」と呼ばれるようになった。そして数十年経ち、周利槃特は自分の心のごみやあかを全て除き、阿羅漢と呼ばれる聖者の位にまでなったのである。お釈迦様は、「悟りを開くということは決してたくさんのことを覚えることではない。わずかなことでも徹底すればよいのである。周利槃特は徹底して掃除をすることでついに悟りを開いたではないか。」と大衆の前でおっしゃった。その後、周梨槃特が亡くなり、彼のお墓にあまり見たこともない草が生えてきた。彼が自分の名を背に荷（にな）ってずっと努力し続けたことから、この草は「茗荷（みょうが）」と名づけられたということである。

覆水盆に返らず　　H,21,11,7

（意味）一度したことは、元には戻すことができない。　　出典：拾遺記

周の国に『呂尚（りょしょう)』と『馬氏（ばし)』という夫婦がいました。呂尚は、学問を修めることに力を注ぐ余り、働くわけでもなく、夫婦の生活は苦しかったのです。それでも呂尚は、気にも止めずに勉学に励んでいたため、ついに妻は夫に呆れて、「とてもあなたにはついていけません。」

と言って、出ていってしまいました。

呂尚は、なおも努力を重ね、深い学識を備えましたが、依然として貧しいままでした。しかし、ある日、渭水のほとりで、１人釣り糸を垂らしていると、通りかかった身分のあると思われる者が、声をかけてきました。話をしてみると、その人物は、賢人として誉れの高い周の西伯昌で、西伯は、「あなたこそ、我が太公（祖父）の望んだ人物だ。」と言って、彼を太公望と呼び、師として敬いました。

西伯との出会いによって、呂尚は、天下にその名を知らしめることとなりました。その彼の元に、ある日、出ていった妻がひょっと現れ、

「昔は、食事にも事欠くほどの貧しさでしたのでお暇をいただいておりましたが、このように立派になられたので、やっぱりあなたの妻としてお側に仕えさせていただきます。」と言いました。

呂尚は、無言のまま盆に水を汲み、それを庭先の土へこぼすと、別れた妻にその水をすくうように言いました。彼女はその水をすくおうとしましたが、水は土にしみ込んで救うことができません。そこで呂尚は、言いました。

「覆水盆に返らず（一度こぼれた水は元に返すことはできない)。一度別れたものは、再び一緒にはなれないものだ。」と復縁を断った。

この話から一度起きてしまった事はけっして元に戻す事は出来ないと言う意味で覆水盆に返らずと、言うようになった。

太公望

周の西伯は、ある日、猟に出かけようとして（獲物を）占いました。すると、「竜でもなく、熊でもなく、虎でも豹でもない。今日の収穫は、覇王を補佐する人物だろう」と結果がでました。猟に出た西伯が、渭水のほとりまで来ると、１人の老人が悠然と釣り糸を垂らしています。「今朝の卦（占いの結果）は、この人かも知れない。」と思い、老人に声をかけてみると、人物・識見ともに覇王の補佐たるに十分であることが分かりました。「私の太公（＝祖父のこと）が、『周に聖人が来て、その者のおかげで周が栄えるだろう』と望んだ人物とは、まさにあなたのことだったのだ。」西伯は、大喜びで語り、太公が望んだ人物ということで、その人物を太公望と名付けました。そして、この故事が由来で、釣りをする人を太公望と呼ぶようになったのです。

耐用年数 H21,10,31

耐用年数とは、減価償却資産が利用に耐える年数をいう。長期にわたり反復使用に耐える経済的に価値があるものの使用又は所有の価値の減価を、各年度に費用配分していく場合の、計算の基礎となる。

法定耐用年数

耐用年数は、その性格上、長短によって納税額に影響を及ぼす。そのため法人税法においては、恣意性を排除する目的で、「資産の種類」「構造」「用途」別に耐用年数を詳細に定め、画一的に扱うこととしている。このように税法で規定される耐用年数を「法定耐用年数」という。法定耐用年数と会計上の耐用年数は一致しないことがあるが、その差額に対しては税効果会計が適用され、繰延税金資産が計上される。

恣意性

「恣」は「し」と読み「ほしいまま」の意味です。典型的な用法：原理原則に基づくのでなく、自分の気の向くままにものごとを決めてしまう状態。

(a) 法定耐用年数

減価償却資産の耐用年数に関して、実務ではほぼすべての法人で、税法の定める耐用年数が採用されています。

本来、固定資産はそれが同種のものであっても、操業度の大小、技術水準、修繕維持の程度､経営立地条件の相違などにより耐用年数も異なるはずです｡ところが、課税の公平化の観点から恣意性を排除するため、原則として税法では、個々の資産の置かれた特殊条件にかかわりなく画一的に定めた耐用年数（「法定耐用年数」）によるべきことを要求しています。

使用可能期間を見積もる

購入後、業務の用に供した後に使用が可能である年数を見積もり、その年数を耐用年数とできる。

減価償却

減価償却は企業会計に関する購入費用の認識と計算の方法のひとつである｡長期間にわたって使用される固定資産の取得（設備投資）に要した支出を、その資産が使用できる期間にわたって費用配分する手続きである。

製造物責任法（ＰＬ）法とは

製品の欠陥によって生命，身体又は財産に損害を被ったことを証明した場合に，被害者は製造会社などに対して損害賠償を求めることができる法律です。本法は円滑かつ適切な被害救済に役立つ法律です。

具体的には，製造業者等が，自ら製造，加工，輸入又は一定の表示をし，引き渡した製造物の欠陥により他人の生命，身体又は財産を侵害したときは，過失の有無にかかわらず，これによって生じた損害を賠償する責任があることを定めています。また製造業者等の免責事由や期間の制限についても定めています。

（製造物責任）
第三条　製造業者等は、その製造、加工、輸入又は前条第三項第二号若しくは第三号の氏名等の表示をした製造物であって、その引き渡したものの欠陥により他人の生命、身体又は財産を侵害したときは、これによって生じた損害を賠償する責めに任ずる。ただし、その損害が当該製造物についてのみ生じたときは、この限りでない。

期間の制限
本法に基づく損害賠償請求権は、原則として、損害及び賠償義務者を知ったときから 3 年の消滅時効、または製造物を引き渡したときから 10 年の除斥期間により消滅する。
※　除斥期間（じょせききかん）とは、法律関係を速やかに確定させるため、一定期間の経過によって権利を消滅させる制度。

製造物責任法の責任期間は引渡し後 10 年です。

2003 年 03 月 20 日(木) 11 時 36 分
医療事故で製造物責任初認定　５０００万賠償命令　（共同通信）
東京都立豊島病院で人工呼吸回路が機能せず死亡した乳児の両親(埼玉県在住)が、医療器具会社２社と都に計約８２００万円の損害賠償を求めた訴訟の判決で、東京地裁は２０日、２社の製造物責任と病院の事前点検ミスを認め、計約５０６０万円の支払いを命じた。
判決理由で山名学裁判長は「それぞれの医療器具に設計上の欠陥はない」としたが、接続すると回路が閉塞（へいそく）する点について「使用上の適切な指示、警告がなかった」として２社の製造物責任を認定した。
製造物責任法（ＰＬ法）に基づき、医療器具の不備を認めた判決は初めて。病院の担当医については「接続して安全に機能するかを事前に点検する注意義務を怠った」と判断した。
問題となったのはアコマ医科工業（東京）の換気器具とタイコヘルスケアジャパン（同）のチューブで、接続して呼吸回路として使用する。(共同通信)

４、責任期間と耐用年数
ＰＬ法ではメーカーの責任期間は、製造物を引き渡してから 10 年と定められているが、これは厚生省の定める耐用年数より著しく長い。例えば補装具の中で最も多く作

られていると思われるＰＴＢ型下腿義足の場合、耐用年数は２年である。責任期間と耐用年数との関係はどうなっているのか、との疑問がある。これに対する厚生省の見解は、耐用年数はあくまでも新しく交付するための１つの目安に過ぎない。頻繁に使う人とめったに使わない人とでは耐用年数は異なる。しかし、製造者側からみると、10 年間の使用に耐えるよう作られている補装具は全く無いと言っても過言ではなく、これに対応する何らかの手段を講ずる必要がある。もし、10 年間壊れない物を作れば、恐らく製造価格は数倍にはねあがり、重さも数倍になり、実用的見地からは存在し得ないことは明らかである。そこで取扱説明書に、耐用年数を明記する、保証書を発行し、保証期間を耐用年数期間とするなどの方法が考えられるが、果たしてこれらが法律的に有効であるか否か、疑問が残り、今後の重要な検討課題であることは間違いないと思われる

家庭製品　２割が 10 年超え使用

ＰＬ法 責任期間 20 年に

製造物責任法（ＰＬ法）の早期改正を求めている全国消費者団体連絡会ＰＬオンブズ会議は６月 26 日、ガス湯沸し器や石油ファンヒーターなどの事故は製造から 10 年以上経過した製品に多く発生しているとして、同法の責任期間を「10 年」から「20 年」に延長することを提言した。独自に３００世帯を調査した結果、石油・ガスファンヒーター、ガス湯沸し器を 11 年以上使っている人は２割を超えた。

自明灯（じみょうとう）　　H.21.10.18

お釈迦さまが死に臨(のぞ)んだ際、弟子たちは、誰もたいへん嘆き悲しみました。
「お釈迦様が亡くなられたら、私たちはどうやって、いったい何にすがって生きて行けばいいのでしょう！..」
集まった暗い顔の弟子たちに、お釈迦さまは、「自明灯、法明灯」という「自らを灯明とし、法を灯明とせよ」をお伝えになりました。
これは、明かりのない暗い道を、自ら照らす灯りとなれという意味で、意識して常に自分の心に明かりを灯すように心がけなさい、自分の足できちんと歩き、自らの心の中に灯を灯しなさいということです。
自分の心の中に灯がない人は、自分自身を照らせないことはもちろん、他の人を照らすことはできません。人様の灯りに頼ろうとせず、自ら進んで灯してあげよう、という気持ちが大事だと思います。
心はどういうわけか放っておくと、暗い考えに偏ってしまいます。ですから、意識して常に自分の心に明かりを灯すように心がけることが必要です。
そんな感動の灯が、次から次へと点火されて行くことを「灯々無尽」と言います。
これからの人生、周囲から多少の助けはあるかもしれないが、自ら歩む道は自分で照らしていかなくてはならないと思います。

そんなに努力したわけでもないのに、何故かトントン拍子にうまく行く時があります。また逆に、必死に血の出るような努力をしても、全くうまく行かず、どんどん後退してしまって、落ち込んでしまうような時期もあります。
その波は、ある時は大きく、またある時は小さく、振幅を繰り返し、全体として大きくうねりながら、人生模様を刻み込んで行きます。たとえ失敗して過ぎ去った日々があったとしても、それを後悔し悩んでみたところで、覆水は盆に返ることは決してありません。重要なことは、過去にすがり執着するのではなく、これから先、「何をしようとしているのか？」、ということではないでしょうか。失敗したり挫折したときにこそ、それをバネに変えれば良いのです。
シェークスピアの「過去のことはプロローグにすぎない」という言葉は、今日の、想像を絶するような激変する時代には、とりわけ当てはまる言葉かも知れません。あの時は良かった。あの頃は幸せだった..。そんなことばかり思っているのは、現在のあなた自身が、その頃に比べて、「充実していない」、「つまらない」、「何もない」等々と、現在の自分を否定的に見つめ、自分自身の心を閉ざしているからではないでしょうか。過去の栄光にすがらなければいけないほど充実していない自分自身の「現在の姿」こそが問題なのだと思います。もう一度、頑張って来た自分自身に、改めて暖かく優しい眼差しを向けてみましょう。せめて、「あの時は良かった」、けれど、「今の自分も素晴らしい！」。「あの頃は幸せだった」、でも、「今も十分幸せなんだ」。そう心から思える自分でありたいものです。

真人（しんじん）　『荘子』（抄）・大宗師篇　　H21.10.12

〔真人〕天の働きを知り、人の働きを知る者は、最高の境地に至った者である。天の働きを知るとは、天に随って生きることである。人の働きを知るとは、人知の限界を守り、人知の及ばないところ（天）を養うことである。天寿を終えて、若死にしない者は、知が盛んなのである。そうではあるが、（このような者にも）患いはある。知は対象があって働く。対象は定まることがない（つねに変化する）。どうして、天が人でないのか、人が天でないのか、知ることができるだろうか。してみると、真人があって、真知というものがあるのである。

なにを真人というのか。古の真人は不幸に逆らわず、成功に誇らず、事を謀らない。このような者は、誤っても悔いず、的を得ても得々としない。このような者は、高い所に登っても恐れず、水に入っても濡れず、火に入っても熱くない（物事に動揺しない）。知を道に仮託することができれば、このような真人の境地に達する。

〔運命随順〕上古の真人は生を喜ぶことを知らないし、死を憎むことも知らない。この世に生まれ出ることを喜ぶのでもなく、死の世界にはいることを拒むこともない。ただゆうぜんとして行き、ゆうぜんとして来るだけである。生のはじめである無の世界を忘れることはないが、そうかといって生の終わりである無の世界だけを求めることもない。与えられた生は喜んで受けるが、これを返すときも未練を残すことがない。このような態度を、「はからいの心をもって自然の道をすてず、人為をもって自然のはたらきを助長しようとしない」というのであり、このような境地にあるものを真人とよぶのである。このような境地にあるものは、その心は一切を忘れ、その姿は静寂に満ち、その額はひろく平らである。秋の日差しの厳しさがあると思えば、春の日差しの暖かさがあり、その喜怒の情は、ちょうど四季のように、自然のままに移り変わってゆく。その心は物と調和を保ち、無限の広さをもつのである。

故に、聖人が兵を用いるとき、国を滅ぼしても人心を失わない。利益を万世に施しても、人を愛するからするのではない（自然のはたらきに身を委ねただけ）。故に、物を思い通りにしたいと願うのは、聖人ではない。親しみがあるのは、仁ではない。天の時に随うのは、賢ではない。利害の道に通じないのは、君子ではない。名を求めて己を失うのは、士ではない。身を滅ぼして真を失うのは、人を使う者ではない（人為から解放されていないから）。

真人が好むものは一であり、好まないものも一である。一であるものも一であり、一でないものも一である。一であるものは天の（無差別の）立場であり、一でないものは人の（差別の）立場である。天と人とが互いに入り混じる、これを真人という。

随処作主（ずいしょにしゅとなる）　＜臨済録＞　H21.9.20

随処に主となる

この語は臨済宗の開祖である臨済義玄禅師が修行者に対して諭された言葉で「随処に主となれば立処（りっしょ）皆真なり」の一句である。いつどこにあっても、如何なる場合でも何ものにも束縛されず、主体性をもって真実の自己として行動し、力の限り生きていくならば、何ごとにおいても、いつ如何なるところにおいても、真実を把握出来、いかなる外界の渦に巻き込まれたり、翻弄されるようなことは無い。そのとき、その場になりきって余念なければ、そのまま真実の妙境涯であり自在の働きが出来るというものである。

法句経の「おのれこそおのれ自身の主（あるじ）である。おのれこそ自身の拠りどころである。おのれがよく制御されたならば、人は得がたき主を得る」と云う言葉にも通じることであるが、その主となっての自在の働きが万縁万境の中で生き生きとして輝いてこそ立処真なりといえることなのだ。

釈尊最後の説法の「自灯明　法灯明」として知られるが、汝らは自らを灯明とし、法を灯明とし他を拠りどころとすること無くて修行するものこそ最高処にあり」とあるように他により所を求めず、己れ自身の中に真実の自己を見いだすことが肝要である。即ち「随処に主」たれば如何なるマインドコントロールにも影響されることは無いはずである。

趙州和尚は修行僧の「一日二十四時間、どのように心を用いたらよいのか」と云う問いに「汝（なんじ）は二十四時間に使われているようだが、この老僧は二十四時間を使いこなしておるぞ」と答えている。人は皆同じ二十四時間を与えられているが、時間に追われ時間に使われている人の方多いのではなかろうか。

現代においては、昼夜の隔てが薄く社会は二十四時間稼動して休みがなくなってきている。そこにわれわれも、ついついその社会の流れに巻き込まれ、主体性も無く、動かされ忙しい忙しいとあくせくさせられていることを反省させられる。すっかりゆとりをなくし、時間を失ってきたようにも思える。なんだか知らぬ間に二十四時間に使われていることにあらためて気づき、「随処に主となる」この語が厳しい叱声となって迫る。

随処に主となるとは、いつ如何なるところにあっても「ここが仏さまから私に与えられた処」として受け止め精一杯、力の限り生き抜くことであろう。

虚無恬淡（きょむてんたん）　　出典：『荘子』（抄）・刻意篇　　H21.9.14

・　事物に対するいっさいの欲を消し去ったやすらかな心。

心を鍛えずして高潔になり、仁義がなくて身が修まり、功名がなくて国が治まり、江海に行かずして静かに、導引（道家の呼吸法）をせずして長寿であれば、忘れないことはなく、有しないものはない。無欲無極となり、あらゆる美が伴う。これが天地の道、聖人の徳である。

故に、こういわれる、「そもそも、恬淡寂漠、虚無無為は、天地の平安であり、道徳の本質である」と。故に、こういわれる、「聖人は休む」と。休めば平易である。平易であれば恬淡である。平易恬淡であれば、憂患も心に入ることがなく、邪気も心を脅かすことがない。故に、その徳は完全で、精神も損なわれないのである。

生きているときは浮かんでいるようであり、死ぬときは休むようである。思慮せず、予想しない。知の光はあっても輝かさず、心の信はあっても無理に守ろうとしない。寝るときは夢を見ず、起きているときは憂いがない。その精神は純粋で、その魂は疲れない。虚無恬淡であって、はじめて天徳に合するのである。

地位や名誉、金、女これらは男にとって、欲望の対象である。この欲は何から生まれて来るのだろうか。

地位や名誉は、人から認められたいからか。それとも威張りたい見栄を張りたいからか。偉くなり人を見下したいからか。

金は、金さえあれば、何でも手に入るからか。食うに困らないからか。生きてゆくために必要だからか。金を持っていない者に対して優越感に浸れるからか。苦労しなくて済むからか。

女は、性欲や快楽を満たしたいからか。子孫を残したいからか。

これらは、全て自分の物にしたいという独占欲からくるのではないだろうか。この独占欲が良いか悪いかは、個人々の考えであるが、これを逆に授かりものと考えたらどうだろうか。

地位や名誉、金は、自分が一生懸命に働き努力した結果から授かったもの。女性は、お互いに愛し合ったから結ばれたものと考えれば、全ては無欲のなかから自然に生まれてくる。しかし、人の世はそうは簡単には行かない。努力したから結果が出るわけでもない。愛し合ったからといって長く続かないことだってある。

良いも悪いも、本来は欲である。全て捨て去り、何があってもそれを素直に受け入れ、是非に囚われないことが、虚無恬淡に繋がるのではないだろうか。

一行三昧（いちぎょうざんまい）　　H21.9.7

三昧とは梵語（ぼんご）のサマディー（三摩地）を音訳したもので、「定（じょう）」「等持（とうじ）」の意があり、心を一境に専注することです。

この三昧と、「常に一直心（いちじきしん）を行ず」という言葉が合体して、何時とはなしに一行三昧の言葉が生まれました。「常に一直心を行ず」の語意が理解できれば、自ずから一行三昧の意も頷（うなず）くことができると思います。

直心とは、「直心是道場」の直心で、まっすぐな心、混じりけのない純一無雑な心、分別執着のない心です。ゆえに、何時でも何処（どこ）でも何事をなすにしても、そのことに純一であれというわけです。

仕事をする時には仕事三昧、遊ぶ時には遊び三昧、食事の時には食事三昧、勉強の時には勉強三昧、その間に一点の雑念妄想をはさむことなく、全身全霊をもって事にあたる、これがまた、一行三昧でもあるわけです。いってみれば「禅」の生命もその一行三昧から始まり、一行三昧に終わると言っても過言ではありません。

一行三昧に徹した面白い話があります。

漢の李将軍は音に聞こえた勇猛な武人で、殊（こと）にその弓術は天下無敵で並ぶ者なきと称された人です。ある時、猟に出かけて山また山を踏み越えて進みます。と、突然一匹の大きな虎に出会います。遙（はる）か彼方（かなた）にうずくまっていたのです。将軍は急ぎ矢を番えて、力一杯、満月の如く引き絞りサッと切って放ちます。狙いは違（ちが）わず、矢は虎の体に立ちます。しめたと思い馳（は）せよってよく見ると、虎ではなく、虎の形をした岩でした。岩に矢が立ったのです。将軍は得意になって、岩に矢が立った例は古今東西聞いたことがない、もう一度やってみようとばかりに、再び射てみます。四たび、五たび、幾たび打っても矢はついに立ちませんでした。

最初虎と思った時には、一行三昧になることができたのです。射ようとする一念の他に何もなかったのです。然（しか）るに岩と知ってからは、「俺の弓術は岩をも通すぞ、見ておれ」という雑念妄想が入ったのです。一行三昧になり切れなかったのです。

「一行三昧」、実に簡単な言葉です。しかし、行じ難く、到り難い言葉です。

完璧（出典：史記「藺相如伝」） H21,8,30

[意味]
１：きずのない玉をいう。転じて欠点がなくてすぐれてよいこと。
２：璧（たま）を完（まっと）うする。

趙の国に和氏の璧という名玉があったのを、秦の昭王が欲しがって、十五城と交換しようと強制した。玉を取り上げたまま、城をよこす意志のないことが明らかであったが、その時、秦に使いした藺相如の働きで、璧をまっとうして帰ることができたという故事によって、人から借りた物を返すことを完璧または完趙という。

＜史記・藺相如伝＞
一つも欠点がなく、完全なこと。完全無欠。璧は、ドーナツ型で平たく、中央に穴のある宝玉。

和氏の璧：天下の名宝の名。貴重な宝。出典：韓非子
春秋時代、楚人の和氏（かし）は楚の山中で玉の原石を見つけて、これを厲王（れいおう）に献上した。厲王がこれを玉の細工師に調べさせた。玉の細工師は言った。「ただの石でございます」和氏は王をたぶらかそうとした不届き者として、左脚を斬る刑に処された。まもなく厲王が亡くなり、武王が即位した。和氏はまたその原石を武王に献上した。武王がこれを玉の細工師に調べさせたところやはり、「ただの石でございます」と言った。和氏は王をたぶらかそうとした不届き者として、今度は右脚を斬る刑に処された。武王が亡くなり、文王が即位した。和氏はその原石をかき抱き楚山のふもとで声をあげて泣いた。三日三晩泣いて、涙は涸れはて血の涙を流した。王がこれを聞いて、人をやって尋ねさせた。「世の中には脚切りの刑を受けたものは多い、お前はなぜ嘆き悲しむのか」和氏は答えて言った。「私は脚切りの刑を受けたのが悲しいのではありません。宝玉を石と言われ、正直者であるのに嘘つきであると言われたのが悲しいのです」文王は玉の細工師にその原石を磨かせ、宝を手に入れることができた。そして、その宝を「和氏の璧」と名づけた。

世に完璧という言葉があるが、本当に完璧はあるのだろうか。私は、仕事には完璧という言葉はないと思う。どんな仕事でも、どこかに無駄があり改善することがあるはずである。プロや職人の世界ではこれでいいという言葉がない。常に「まだまだ」と自分を精進して行く。これがなければ進歩発展はない。
自分を見つめ直し、これでいいのか、これでいいのかと自分に問いかけて行きたい。

守破離（しゅはり） H21.8.9

空手道でも、剣道でも、書道でも、茶でも、花でも、その修行の過程を「守」・「破」・「離」の三段階に分けている。

「**守**」というのは、一から十まで型通りにやることであり、それが一通り終る頃になると、型にはまり融通のきかないものになるので、「破」の段階に入れというのです。「**破**」とは文字通り「破る」ことで、型にはまったことを破って行く努力をすることであり、一寸考えると何でもないことのようですが、それは「守」の段階をふまない人の考えることで、本当に「守」の型にはまった人がそれを破るということは実に容易でないことです。

空手の中で、型が大変に上手であるが、組手が出来ない人たちを見かけます。大会でも型は型、組手は組手というふうに分けているようです。本当は型が上手で組手が強いという様にならなければならないと思います。一つ一つの技が上手になれば、組手に生かせなければ意味がなく、「守」から「破」ることがむずかしく、出来ないのではないかと思っています。

ところで、「破」の段階を卒業すると、はじめて「**離**」の段階に入るのですが「守」からも「破」からも離れて型通りやらなければならぬ時には型通りにやり、型を破る必要のある時には、これを破りそれこそ「心の欲する所に従って矩をこえず」の境に達するのですが、それが仲々容易のことではなく、それこそ、**一所懸命 ── 一所懸命 ── 一所懸命**のことなのです。というのは、一応は「守」－「破」－「離」－の段階を経て、自由の境地に遊び得たと思っているうちに、あるいは内的にあるいは外的にその時の自己の力量以上の問題にぶつかると、これではならないという自己疑惑、もしくは自己否定に陥り、更により高き段階の新たなるものを求めて、これに対して「守」の修行に進み、「破」に進み、「離」に進み、守破離 ── 守破離、と進むのが真面目な人生のすがたと思います。

入木道（じゅぼくどう） **H21.7.25**

「入木道（じゅぼくどう）」とは「筆道（ひつどう）」のことであり、書道の異称です。既に中国の書論には「入木」のことが記されています。

「余、志学の年より心を翰墨にとどめ、鍾・張の余烈を味わい羲・献の前規をくみ、（中略）入木の術に背くも（筆道を十分に極めておりませんが）臨池の志を隔てることなし」（孫過庭『書譜』）近頃は書家の間でもあまり耳にすることはないが、出典は唐・張懐瓘の『書断』にある王羲之のエピソード。羲之が書いた祝版を工人が削ったところ、木に墨が三寸も入っていたという話です。「羲之の祝版に書す。工人、これを削る。筆、木に入る三分」

この話、木の中に何センチ何ミリも墨が染み込むという、まず起こりえない現象が“書聖”だからこそできたという驚愕を語ったものです。

わが国の書道を入木道と呼び慣わしたのは、それだけ王羲之の感化が大きかった証拠で、『万葉集』に「羲之」と書いて「てし（手師）」と読ませたのがその好例です。

「入木道とは書道の異称、藤原行成以来の伝統的な世尊寺家以来の秘説を集大成した『夜鶴庭訓抄』をはじめ『才葉抄』『入木抄』を収録」とあります。いずれも平安末期から中世に著された書の“奥伝”を記した秘本であり、江戸期までの日本書道史を代表する三大書論です。

三書とも通底する考え方はおおむね一致していますが、異なる意見も散見されます。とりわけ目を引いたのは、『才葉抄』の楷書先習論と『入木抄』の行書先習論の違いです。

ブリダンのロバ　　H21.7.19

ブリダンのロバという比喩（ひゆ）がある。これは、あるロバがいて、そのロバから等距離に二つの食料が置かれたとすると、ロバはどうなる（どうする）かという問題である。等距離にある（条件が同じである、均衡状態にある）のだから、ロバはどちらを選ぶことも出来なくて、飢えて死んでしまうのではないか、というわけである。これはブリダンという中世の学者の考えたものだとされているが、ショーペンハウアーが調べたところでは、ブリダンの著作には見あたらないという。我々がこの比喩について具体的に知ることができる例はスピノザの『エチカ』にある。そこでは、二つの餌ではなく、飲み水と食料となっている。

この問題は、人間の自由意志問題の比喩として語られる。もし、自由意志が存在するなら、ロバ（人間）は、外的条件が同じであっても、内的＝自発的にどちらかの餌を選ぶだろうし、自由意志がなければ、どちらも選べないままに飢えてしまうだろうというのである。

スピノザは後者だと考える。スピノザの考えでは、我々は外的な諸条件によって決定されているのだ、と言いたいわけである。これに対してライプニッツは、どちらの解答を選ぶのでもなく、そもそもこの問題そのものがおかしいと指摘している。つまり、世界には、そのような絶対的な均衡状態などないのだ、というわけである。実際、スピノザの場合でも、水と食料になっているのは不思議である。これなら二つの同じ食料が等距離にあるのだとする方が、均衡状態を描くには適している。しかし、これは比喩であって、スピノザもそうした均衡状態が起こり得ると述べているのではない。

サイトカイン・ストーム H21.7.10

サイトカインの過剰産生をサイトカイン・ストームと呼ぶ。スペイン風邪やトリインフルエンザによる死亡原因と考えられている。この場合サイトカインは免疫系による感染症への防御反応として産生されるのだが、それが過剰なレベルになると気道閉塞や多臓器不全を引き起こす（アレルギー反応と似ている）。これらの疾患では免疫系の活発な反応がサイトカインの過剰産生につながるため、若くて健康な人がかえって罹患しやすいと考えられる。

サイトカイン（cytokine）とは、細胞から分泌されるタンパク質で、特定の細胞に情報伝達をするものをいう。多くの種類があるが特に免疫、炎症に関係したものが多い。また細胞の増殖、分化、細胞死、あるいは創傷治癒などに関係するものがある。ホルモンと似ているが、ホルモンは分泌する臓器があり、比較的低分子のペプチドが多い（しかし、サイトカインとホルモンは、はっきりとした区別があるものではなく、エリスロポエチン（erythropoietin）やレプチン(leptin) など両方に分類されることがある）。

また、リンパ球に由来するサイトカインを、リンフォカイン（lymphokine）ということが多い。

一部は医薬品として用いられている

サイトカインは多機能的、つまり単一のサイトカインが標的細胞の状態によって異なる効果をもたらす。例えば免疫応答に対して促進と抑制の両作用をもつサイトカインがいくつか知られている。

またサイトカインは他のサイトカインの発現を調節する働きをもち、連鎖的反応（サイトカインカスケード）を起こすことが多い。このカスケードに含まれるサイトカインとそれを産生する細胞は相互作用して複雑なサイトカインネットワークを作る。たとえば炎症応答では白血球がサイトカインを放出しそれがリンパ球を誘引して血管壁を透過させ炎症部位に誘導する。またサイトカインの遊離により、創傷治癒カスケードの引き金が引かれる。

サイトカインはまた脳卒中における血液の再還流による組織へのダメージにも関与する。さらに臨床的にはサイトカインの精神症状への影響（抑鬱）も指摘されている。

明珠在掌（みょうじゅたなごころにあり） **H.21.6.6**

この言葉は臨済宗でよく使われる公案書である「碧巌録」に収録されています。読みは「みょうじゅたなごころにあり」です。明珠とは計りきれないほどの価値のある「宝」のこと、それをあなたはすでに持っています、という意味です。

その宝は、遠くに探しに行かなくても、すぐそばにあるのと言います。それはあなたの手の中に宝物がすでにあるからです。しかし、宝は目に見える金やダイヤモンド、地位や名誉などと思いがちになってしまいます。

禅の考えで意訳すると、「あなたはすでに充分に幸せですよ」となります。「私はすでに充分に幸せ。」なんだか、改めて身の回りとか 自分の内側とかを見直すきっかけになりませんか。

「私はすでに充分に幸せ。」よくよく考えてみれば、自分って、本当に幸せなんだなと思います。妻、かわいい子供たちに囲まれ、素敵な友達がいて、人に恵まれ、健康に恵まれ、仕事に恵まれ、平和でご飯の美味い日本に生まれ、お笑い番組で笑い転げて、好きなものをたらふく食べることができ、おまけに、無駄な脂肪までたくわえて。そして、どんな宝物にも代えられる可能性を秘めた「未来」まで与えられているから、そう思うと、私は、すでに充分に幸せなんだな思います。

人は宝物がきっとどこかにあるはずだと、一生懸命外に探しにいきます。けれど、掌（てのひら）を見れば、そこにあるかもしれません。『どこにいかずともみんな幸せをつかんでいる。』もう一度自分を見つめ直して、改めて身の回りとか 自分の内側とかを見直せば、今おかれている環境がどれだけすばらしいものか。

今ある環境に感謝して、感謝の気持ちを忘れずに今、自分ができることをやるべきことを、一生懸命に全力で、自分らしく取り組んで行くことができれば、本当の幸せ明珠に気づくことができるかも知れません。

因果応報（いんがおうほう） **H21.5.6**

因果応報とは、ことわざなどに含まれる用語である。「善い行いをすれば、感謝などの善い行いで返り、悪い行いをすれば、懲罰などの報いで返る」と、主に後者の「悪行は必ず裁かれる」という意味で使われることが多い。しかし実際の起源・意味としては間違っており、ただ単に「行動」と「結果」は結び付いているという意味でしかない。

仏教的な解釈では、釈迦は、原因だけでは結果は生じないとし、直接的要因（因）と間接的要因（縁）の両方がそろった（因縁和合）ときに結果はもたらされるとする（因縁果）。そこで、縁起と呼ぶ法によってすべての事象が生じており、「結果」も「原因」も、そのまま別の縁となって、現実はすべての事象が相依相関して成立しているとする。

仏教で通俗的に因果と言う場合には、業（ごう）思想と結びつき、自己の存在のあり方にかかわる因果性をいうことが多い。「善因楽果・悪因苦果」と言うように、人間や天人として生まれる善の結果や、地獄・餓鬼・畜生として生まれる悪の結果を得るのは、前世の自己の善業あるいは悪業を原因とするという、方便（本来の教説に導くための一種の方法）としてしばしば使われる。この因果は自然科学的法則ではなく、われわれの行為に関するものである。すなわち、自分のやった善は善果を生み、また悪を行えば悪果が返ってくる、と教える。因果応報とも言われ、人間の行為を倫理的に規定する教説として言われたものであろう。

しかし、このような一般的考え方は、縁起説から考えられない俗説であり、仏教本来の考え方にはそぐわない。

仏教における縁起（えんぎ)は、仏教の根幹をなす思想の一つで、世界の一切は直接にも間接にも何らかのかたちでそれぞれ関わり合って消滅変化しているという考え方を指す。縁起の語は「因縁生起」（いんねんしょうき）の略で、「因」は原因、「縁」は条件のことである。

経典によれば、釈迦は縁起について、

縁起は、「此があれば彼があり、」「此がなければ彼がない。」という二つの定理によって、簡潔に述べられうる。このような有と無と二つの文句が並べられるのは、修辞学的な装飾や、文学的な表現ではなく、この二つは論理的に結び付けられており、「此があれば彼がある」ということの証明が、「此がなければ彼がない。」ということなのである。具体的な例としては、「生がある時、老いと死がある」「生がない時、老いと死がない」の二つがあげられる。なぜなら、生まれることがなければ、老いることも死ぬこともないからである。このように後者の「此がなければ彼がない。」は、前者の「此があれば彼がある」ことを証明し、補完する、必要不可欠なものである。

行雲流水（こううん-りゅうすい） H21.4.28

意味

空行く雲や流れる水のように、深く物事に執着しないで自然の成り行きに任せて行動するたとえ。また、一定の形をもたず、自然に移り変わってよどみがないことのたとえ。▽「行雲」は空行く雲。「流水」は流れる水。諸国を修行してまわる禅僧のたとえにも用いられることがある。「流水行雲りゅうすいこううん」ともいう。

出典（蘇軾（そしょく）が友人の謝民師推官（しゃみんしすいかん）に宛てた書）

蘇軾は号を東坡(とうば)といい、博学宏才、儒佛道（儒教、佛教、道教）の三教に通じており、詩文の他に書画にも優れ、北宋第一の文化人といわれています。「行雲流水」は、その蘇軾が友人の謝民師推官（しゃみんしすいかん）に宛てた書の中で、謝民師の文章に対して、次のように評したことに由来しています。「あなたの詩賦や文章は、行雲流水のごとく、形式にとらわれず、流れるままに流れ、しかも止まるべきところにはきちんと止まっています。思想や言葉はまことに自然に表出され、その描写はとても自由で生き生きとしています。」行雲･流水は文字どおり空行く雲と流れる水、どちらも作為のない自然のままの流れを象徴しています。自然で伸びやかな文章のたとえ、あるがままの自然な生き方のたとえ。また何事にも執着せずに自然の成り行きに任せて行動することのたとえとして用いられます。さらに雲水と略して、諸国を行脚して修行を積み重ねる禅僧のたとえとしても用いられています。

禅僧の雲水

雲は悠然として浮かび、しかもとどまることなく、水はまた絶えることなくさらさらとして流れて、また一処にとどまることがない。この無心にして無碍自在のありようが禅の修行にもあい通じることから、この語を禅者は好んで用いた。今も禅の修行僧を「雲水（うんすい）」と云うのも雲が悠々と大空を行く如く、また流れる水の如く一処にとどまらず師をたずね修行の行脚したことから名づけられたことばです。

「行雲流水」は自然現象である。空を行く雲、川を流れる水は一時も同じ状態ではない。雲の表情は一瞬一瞬ごとに変わり、湧きては消え、消えてはまた生ず、でありまた流れる水も常に変化して様々な表情があるように、この行雲流水の語は世の無常を表わした語でもあります。

それはそのままわれわれの人生にも通じることです。雲にはやさしい風ばかりではありません。吹きちぎり吹き飛ばす風もあります。水の流れにも瀬があり曲がりくねる淵があり一様な流ればかりではなく、長い人生もまた然りです。人生、順風満帆ばかりなんてありえません。どんなに障害があり、喜怒哀楽様々な出来事の連続の中にあっても、常に心はその一処にとどまらず、執着せず、雲の如く無心にして淡々と、さわやかに生きるところにこの「行雲流水」の語が生きます。余談ですが、墨染めの衣にわらじ履き、網代笠を被った雲水の姿が自然の風光の中にあれば、ひとつの風景画に見えるかもしれません。ですが、雲水である当人は如何がな心境でしょうか。

燈燈無尽（とうとうむじん） H21.4.17

この言葉は、「維魔経」（ゆいまきょう）という古い仏教の経典にある「無尽燈(むじんとう)」という言葉から生まれています。

その昔‥‥。釈尊(ぶった)（釈迦牟尼世尊(しゃかむにそん)の略）は亡くなられる前に、お弟子さんを伴って北へ北へと旅をしていました。その旅の途中に「ヴェーサーリ」という美しい街に立ち寄られます。その街に維魔(ゆいま)という人が住んでいました。維魔は「資財無量」（裕福で人望がある）な人で、悟りをひらき不思議な 力をもって、いつも苦しんでいる人や貧しい人たちを助けていました。その維魔が病気になって床に伏せた時、釈尊はお弟子さんたちを集めてこう言いました。

「誰か私の代わりに維魔を見舞ってはくれないか」

しかし、お弟子さんたちは、何でも良く分かる維魔に尻込みをして、誰も行こうとはしてくれません。釈尊が、お弟子さんの一人である持世菩薩(じせぼさつ)に見舞いに行くよう言いましたが、やはり見舞いには行けないと言います。どうして行けないのかと釈尊が尋ねると、持世菩薩は、昔維魔と出会った時の話をします。

ある日‥‥。持世菩薩が静かな部屋に座っていると、魔波旬(まはじゅん)（正しい教えを破壊する魔王。仏やその弟子たちに付きまとって仏道修行・解脱の妨げをする）が、たくさんの天女を従えて、音楽を奏しながら帝釈天(たいしゃくてん)の格好をしてやってきました。帝釈天が魔波旬とは知らない持世菩薩は、帝釈天に説法をし始めたのです。

「いい話をしてくれた」

魔波旬はそう言って、私の天女を侍女としてさしあげようと言います。

「とんでもない」と押し問答が始まってしまいます。

そこへ維魔がやってきて「わたしがもらってあげよう」と言います。

神通力のある維魔の前にあっては、さすがの魔波旬も慌てふためいて、逃げようとしますが逃げることができません。

すると天上から「悪魔よ天女を維魔に与えるなら逃げることができるぞ」という声が聞こえてきました。魔波旬は慌てて天女を維魔に与えて去ってしまいます。その時維魔は残された天女たちに説法し、さとりに向かいたいという気持ちを起こさせました。天女たちは、皆魔波旬のところには帰りたくないと言い出してしまいました。困ったのは魔波旬です。

「なんとかしてくれ」と維魔に助けを乞います。

そこで、維魔が天女たちに教えたのが「無尽燈(むじんとう)」という言葉なのです。「たった一つの燈が、百千もの無数の燈に火を付けていく。そして、皆が明るくなり、その燈が絶えることがない。それが無尽燈という考え方だ。あなたたちも自分自身の心の中にあるさとりの燈を、魔波旬のところにいる大勢の天子や天女たちの心の燈に火をつけて歩くのだ。一人の人が百千の人々をさとりに向かわせたとすると、それが無尽燈である。」こうして、天女たちは新しい気持ちになって帰っていくのでした。

ともしび運動

つきることのないともしびを人の心に点していこう。
この思いを形にする運動を起こそうと、昭和５１年に当時の神奈川県知事　長洲一二が提唱した運動が「ともしび運動」です。

一燈をもちよろう　　―ともしび運動県民のみなさまへ―

肩が触れあうような都会の中で、ひとり暮しのお年寄りがひっそりと果てて、何日も発見されなかった－こんなニュースが繰り返されています。悲しいことです。

今“物”の面だけでいえば、豊かで、便利で、日常生活のすみずみまで、きめ細かい工夫が凝らされています。それに引きかえ、何か寒々と冷えきってしまったかに見える“心”の世界。

一見、自由に、合理的に生きているようで実は、ひとりひとりがバラバラで、寂しく味気なく感じられる世の中。

いや、私は固く信じます。私たちがもともと持っていた隣人へのあの何げなく温かい思いやりの心は、けっしてなくなったわけではない。人が人を求め、心が心を呼びあう人間本来の願いは、いまも私たちの胸の底深く、静かに燃えているはずだ。

その火を思いきって外に出しましょう。みんなで高々とかかげましょう。

人生という長い旅路には、山もあり、川もあり、天気の日もあらしの日もあります。運悪く足を傷めることもあります。

人間はすべて、多かれ少なかれ重荷を背負って歩む、共に旅する仲間です。特別重い荷を負う疲れた仲間が身近かにいれば、声をかけ、励ましあい、肩をかして、いっしょに歩いていく―これが人生の生き方でありましょう。

私たちはだれでも例外なく老人になります。このひしめき合う現代、思いもよらぬ事故に出合って、あすにも不自由な身になることもありえます。

お年寄りも若者も、健常者も障害者も、みんなが手を握り、肩を組みあって、生きがいを見いだす世の中をつくりたい―そんな願いをこめて、“ともしび運動”を始めました。

“ともしび”―これは古い仏典の一句“燈々無尽”からお借りしたことばです。ひとりの胸にともった小さなともしびも、それを次から次へと点じてゆけば、尽きることなく広がって、太陽のように明るく暖かく、この神奈川を照らすことを、私は確信いたします。

県は、行政の立場で、全力を傾けて努力いたします。どうぞ、ごべんたつください。同時に、県民のみなさまにもお願いします。

みなさんそれぞれ、ご自分のお考えで、おできになる場所で、おできになるときに、おできになることで、“ともしび運動”にご参加くださいませんか。たとえどんなに小さな火でも、ひとりひとり、みんなが持ち寄る“一燈運動”を、お考えくださいませんか。

破草鞋（はそうあい）　　H21.3.21

「草鞋」とはわらであんだ履物、わらじの事です。「草鞋を破る」と読めば草鞋をすり切らして長旅をする意、所謂「行脚」の事で、名師を求めて諸方の禅寺を遍参して修行する事です。「破れ草鞋」と読めば履き古されてすり切れ、今は路傍の片すみに打ち捨てられて誰一人として見向きもしない破れわらじの意となります。

禅の修行は一切の妄想執着を断ち切って、真の「無一物」の境涯になりますが、その妙境涯にもとどまる事なくそれを捨て去って、学んだ法や修した道を少しもちらつかせることなく、悟りだの、仏だの、禅だの、その影さえ窺い見る事が出来ない、馬鹿なのか利巧なのか、偉いのか凡夫なのかさっぱりわからない、長屋に住む八つぁん、熊さんの手合と同じく、人知れず平々凡々、一個の破れわらじのように、その存在すら知られずに生きていく消息こそが、本当の禅僧の境涯だというのです。他人から有り難がられるようでは未だというわけです。

「破草鞋」が、「閑古錐――古びた錐」「破沙盆――こわれたスリバチ」等々と共に禅門で重用されるのはその辺の理由からです。

破草鞋のように生きた人を紹介します。

近世の名僧、渡辺南隠禅師（一八三四～一九〇四）は、はじめ広瀬淡窓に就いて儒学を学び、後に出家して修行し、東京・白山道場を築いて多くの僧俗を教化された人です。

この南隠和尚が遷化（死亡）された後、近所のお婆さんがいうには、「老師ご存命中は私達のいいお茶飲み友達だと思って、しょっちゅう参りましたが、おかくれになってから聞けば、たいそう偉いお方であったそうですね……」。

妙心寺の関山国師は大灯国師の法を嗣ぐと、独り美濃の国伊深の里に隠れ、村人達に頼まれるにまかせて、田畑の耕作、牧牛、伐木に炭焼等々、手伝いの日々でした。村人達にとっては誠に便利で重宝な老爺としかうつりませんでした。

優雅な勅使が山間の僻村、伊深の里に入ってくるのを見て、村人達はまさに青天の霹靂でした。これまでは単なる老爺だと思っていた関山国師を花園法皇の命で迎えに来たのですから、村人の驚きはひとしおでした。

東福寺の画聖兆殿司は、破草鞋の如く生きんと、自ら「破草鞋」をもって号としたといわれています。「破草鞋のように生きる！」、口で云うは易し、実行する事はなかなか難しいようです。

益者三友（えきしゃさんゆう）　　三益友（さんえきゆう）　　H21．3．20

《「論語」季氏から》有益な3種類の友達。すなわち、正直な友、まごころのある友、物知りの友。益者三友。三損友

孔子の曰わく、益者（えきしゃ）三友。直きを友とし、諒（まこと）を友とし、多聞を友とするは、益なり。便辟（べんへき）を友とし、善柔を友とし、便佞（べんねい）を友とするは損なり。

孔子が言われた、「有益な友達が三種、有害な友達が三種。正直な人を友達にし、誠心の人を友達にし、物知りを友達にするのは有益だ。体裁ぶったのを友達にし、うわべだけのへつらい者を友達にし、口達者なのを友達にするのは、害だ。」

付き合って為になる友､為にならない友にそれぞれ三つのタイプがあるという意味。剛直な人、誠実な人、教養のある人、この三者が付き合って為になる友であり楽なほうに付きやすい人、人に媚びるような人、口先だけうまい人、この三者が為にならない、と孔子は教えています。
友だちを見れば、その人となりがわかるといいますが、良い友人を選ぶことはもちろんのこと、自分自身が損者三友の部類に入らないよう、心しなければなりません。

一口吸盡西江水（いっくに きゅうじんす せいこうの みず）　　H21.3.11

禅語「法演禪師語録」より。『碧巌録』「第四十二則」
居士問馬大師。不與萬法為侶是什麼人。
大師云。待汝一口吸盡西江水。即向汝道。
師云。一口吸盡西江水。洛陽牡丹新吐蕊。

[読下例]
居士馬大師に問う。「万法と侶[とも]たらざるもの是れなんびとぞ。」
大師云く。「汝が一口に西江の水を吸盡せんを待って、即ち汝に向かっていわん。」
師云く。「西江の水を一口に吸盡すれば、洛陽の牡丹　新に蕊を吐く。」

『龐居士語録』に「居士後之江西參馬祖大師。問曰。不與萬法為侶者是什麼人。祖曰。待汝一口吸盡西江水即向汝道。士於言下頓領玄旨。遂呈偈。有心空及第句。」（居士、後の江西、馬祖大師に参じ、問うて曰く、万法と侶（とも）と為らざる是れなんびとぞ。祖曰く、汝の一口に西江の水を吸尽するを待ちて、即ち汝に向っていわん。士、言下に於いて頓し領玄旨を領す。遂に偈して、有心空及第の句を呈す。）とあり、『法演禪師語録』に「龐居士問馬大師。不與萬法為侶是什麼人。大師云。待汝一口吸盡西江水。即向汝道。師云。一口吸盡西江水。洛陽牡丹新吐蕊。」（龐居士、馬大師に問う。万法と侶（とも）と為らざる是れなんびとぞ。大師云く、汝の一口に西江の水を吸尽するを待ちて、即ち汝に向っていわん。師云う。西江の水を一口に吸尽すれば、洛陽の牡丹、新たに蕊を吐く。）とあり、『碧巌録』に「不與萬法為侶。是什麼人。祖云。待爾一口吸盡西江水。即向汝道。士豁然大悟。作頌云。十方同聚會。箇箇學無為。此是選佛場。心空及第歸。」（万法とともと為らざる是れなんびとぞ。祖云く。なんじが一口に西江の水を吸尽せんを待って、即ち汝に向かっていわん。士豁然として大悟し、頌を作って云く。十方同聚会。箇箇学無為。これは是れ選仏場。心空及第して帰ると。）とある。利休は古渓和尚に参じて、この「一口吸盡西江水」の語によって悟りを開いたという。　「松風供一嚱」　と同じ境地という。

私の解釈はこうです。　人という"部分"が、江(自然の代表)という"全体"と　一体になった時、初めて真理が見える。また、利休は古渓和尚に参じて、この「一口吸盡西江水」の語によって悟りを開いたといわれているそうです。

植物社会に学ぶ　　健全に生きる生物社会の掟　　**H21.3.8**
「競争」と「我慢」、「共生」

物言わぬ植物たち。それでも、私たち人間に多くのことを語りかけてくれます。植物と関わって約 60 年、森づくりに生涯をかける植物生態学者である横浜国立大学名誉教授の宮脇昭さん（80）。「『競争、我慢、共生』こそ、植物が生き延びるための生物社会の掟」と明言しています。一方、「同じ生物社会である人間社会も似ている」と共鳴するのは、山田英生・山田養蜂場代表（51）。企業経営者の立場から「個性的で多様な人材こそ、組織には必要」と強調しています。先の見えない不透明な時代、植物社会から学ぶべきことは、限りなく多いようです。

宮脇　昭（みやわき・あきら）　横浜国立大学名誉教授

1928 年、岡山県生まれ。ドイツ国立植生図研究所で潜在自然植生理論を学ぶ。横浜国立大学教授、国際生態学会会長などを経て現在、（財）地球環境戦略研究機関国際生態学センター長。国内外約 1600 ヵ所以上で植樹指導。91 年、「日本植生誌」の完成で朝日賞、92 年、紫綬褒章。06 年、ブループラネット賞、「植物と人間」など著書多数。

山田英生（やまだ・ひでお）㈱山田養蜂場　代表

1957 年、岡山県生まれ。1983 年、学卒後勤めた会社を脱サラ U ターンして養蜂場の後継者となる。自前で研究所を持ち、添加物を排した自然派化粧品、予防医学的見地からの健康食品など独自の商品開発を行っている、直販方式により、全国に根強いファンを持つ。ネパールや中国・内モンゴルへの植樹活動や世界遺産保護活動、全国の小学校へ図書を寄贈する「みつばち文庫」などの社会貢献活動に積極的に取り組んでいる。

よく似ている植物と人間社会

宮脇　森の中では、高木、亜高木、低木、下草が、さらに土の中ではカビやバクテリアなどいろんな生き物が限られた空間で、お互いにいがみあいながらも我慢し、種の能力に応じて精一杯生きています。この「競争」、「我慢」、「共生」こそ生物社会の掟です。森の中では、好きな植物同士が好きなところで勝手に生きているわけではありません。厳しい条件下で、ちょっと我慢しながら嫌な奴とも共生しているのです。共生とは、決して仲良しクラブではありません。競い合いながらも、互いに少し我慢して、すみ分けて共に生き続けること。これが健全な生物社会の姿であり、植物が生き延びるための条件です。

山田　人間社会も、まったく同じだと思いますね。「競争」について言えば、同じ種同士、近い種同士が競い合うことによって早く伸びようとするのですね。先生の植樹方法でとくに間隔をあけて植えるよりも密植の方が、互いに早く成長しようとする、との話は大変興味深いです。人間社会では、いつも全員が、ライバルでは困りますが、

互いに競争し合う関係、つまり、よい意味でのライバル関係は必要ではないでしょうか。「我慢」は、今は成長するチャンスがなくても、じっと時を待つという意味ですね。しっかりと力を蓄えた、成長する前の熟成期間、成長期と考えてもよいかもしれません。我慢は、人間にとっても組織にとっても、たいへん重要な意味を持っています。そして「共生」は、いろんな人が、それぞれの役割、責任を分け合って共に生きている状態。共生だけに流れ過ぎるのは、よくありませんが、それぞれが各自の役割を自覚し、分担しながら目標に向かって進むことは、組織として欠かせません。「競争、我慢、共生」という３つの言葉は、人間社会が健全に発展するためのキーワードでもあると思います。

多種多様な樹木混ぜて植える

宮脇　生物は、競争を通してのみ発展しています。だから人間社会も、生物社会を見習ってすべての競争を拒否しないでいただきたい。好きなものだけを集めるのは、危険だし、いろんな種類が集まる多様性こそが自然界では健全な姿です。だから植樹する場合でも、好きな木だけを植えない。土地本来の主役の本となるトップとそれを支える３役５役の木を中心にできるだけ多くの樹種を「混ぜる、混ぜる、混ぜる」のが鉄則です。重要なことは、それぞれの地域のトップと３役５役の木の種類を取り違えないこと。会社だって同じだと思いますが・・・。

山田　本当にそう思いますね。同じようなことばかり考えている人や同じような性格の人ばかり集めていると組織は、もろくなってしまいます。いろんな人開かいるほうが、いざという時に、思わぬ威力を発揮するものです。例えば多少、うるさいとか、性格が扱いにくいとか、目の上のたんこぶのような個性的な人たちがいた方が組織としては、健全だと思いますね。自らの組織の方針や考え方も全員が肯定しているよりは、異なった見方や考え方ができる人がいた方がよいのです。全部が全部気の合う人ばかりだと、かえって危険で、組織として長続きはしないでしょう。

トップに必要な現場至上主義

宮脇　よく見ておられます。それと、自然は人それぞれの顔ほど違い、何ひとつ同じものはありません。私は、植物の研究をする時は、まず緑の現場に出かけ、自分の体を測定器にしながら、自分の目で見て、においを嗅ぎ、なめて、触って調べてきました。これは、ドイツに留学したとき、恩師のラインホルト・チュクセン教授に連日のように山野に連れて行かれ、現場で徹底的に教え込まれた哲学なのです。以来 58 年間、現場一筋でやってきました。人間社会だってそうですよ。トップはすべて部下に任せず、自ら現場に足を運び、現場が発している微かな情報から正しい全体像を把握し、的確な指示を出すべきでしょう。

山田　まったく同感ですね。私もこの世界に入って以来、現場一筋でやってきました。今、経営者として現場の重要さを身を持って感じています。

宮脇　まさに「現場、現場、現場」です。現場に出れば、お金や最新の機械でも測

れない「いのちのドラマ」が展開しているわけですから。

山田　話しは変わりますが、世界中の伝統的な農作物のうち４分の３の品種が、この１００年間で失われたと言われ、機械化に適した作物が重点的に生産されるようになりました。単一栽培の拡大によって、遺伝資源の多様性が失われつつあります。農業の商業化と食生活の変化によって栽培品種が限定されるようになった結果だと思います。一説によるとぃ今世界的に話題になっている､「ミツバチのいないいない病」も、これが原因ではないかと言われております。単一作物の栽培が過ぎて、ミツバチの栄養に偏りがでたためだというのです。昔の農業には知恵があり、そんな無茶はしませんでした。例えば、アンデスのジャガイモ栽培では、気象の変化や病害虫に対応できるように、同じ畑に何種類もの品種を組み合わせて植えていたといいます。

宮脇　確かに知恵がありました。しかし、生き物は、厳しい環境の中でこそ本性を発揮します。厳しい環境条件に耐えて長持ちするものが本物です。

山田　人間には思わぬ可能性というか、秘めた力が備わっていると、つくづく思いますね。ただ、現実には、誰もがそうした能力や潜在力があるとは気づいていないから、その力を引き出そうとしないのではないでしょうか。私事で恐縮ですが、１９８８年 10 月下旬、当時社長だった父が倒れ、その２日後には、自宅を全焼するという災難に遭いました。短期間の間に予期せぬ不幸に直面しましたが、私はこの二重の災難を大きな転機ととらえ、死に物狂いで仕事に取り組みました。その結果、思いもよらなかった事業の発展につながったのです。「人は誰しも無限の可能性を持って生まれている」。この言葉は、幕末の教育者、吉田松陰の言葉でありますが、人は誰でも無限の可能性を持っていることを私は、自分の経験から学びましたね。

宮脇　私の経験から言っても､人間本気になれば 98%､希望は叶うと思うんですね。もしうまくいかなかったならば、それは手を抜いていたか、油断していたかのどちらかではないでしょうか。

山田　先生のおっしゃる通り、自然のしわざを人間が行うのは無理ですけど、自分の願いを 98%実現するのは、できないことではないと思います。

原油高騰で痛感現代文明の弱さ

宮脇　もう一つ、生物社会では最高条件と最適条件は、適うということをぜひ、知っておいていただきたい。すべての敵に打ち勝ち、すべての欲望が満足できる最高条件というのは、長い地球の生命の歴史で見ると、マンモスや恐竜の絶滅の例を見るまでもなく、むしろ危険な状態といえます。これに対し、生態学的な最適条件というのは、生理的な欲望をすべて満足できない、少し厳しく少し我慢を強要された状態のことを言います。人間社会でも地位、名誉、金、異性の問題などすべてがうまくいっている人は、いつドンデン返しを食うかも知れません。逆に、少し我慢を強いられている人は、あすに向かって大いに希望を持って生きてほしいと思います。

山田　なるほど。最高条件と最適条件は違うんですね。

宮脇　はい。例えば、これはドイツでの私の経験なんですが、日本人はドイツに行

くと、有名ブランドのカミソリを 10 個も２０個も大量に買い込もうとしますから、すぐ在庫がなくなってしまいます。しかし、メーカー側は、小売店にすぐカミソリを卸そうとしないからＩカ月たっても、そのカミソリは、店頭に並びません。たまたま、そのメーカーを訪れる機会があったので、「日本では商品が売れると、工場を 24 時間稼動して大量生産します。こちらではこれだけ売れているのに、なぜ生産制限をしているのですか」と尋ねました。すると、担当者は「私たち社員や店もこれで十分、食べていけます。もし生産を増やし、売れ残ったら処置に困るじゃないですか」と逆に言われ、「なるほど」と感心したことがありました。「節度をわきまえる』というか、「ほどほどでいい」というか、日本とドイツの考え方の違いなんてすね。人間社会も最高条件と最適条件について真剣に考えなければならない時代がやってきたと思います。

山田　３年前、アメリカ南部をハリケーンが襲い、産油地帯が洪水に見舞われ油の価格が一気に上がったことがありましたね。また、最近のサブプライム問題に端を発した石油の急騰についてもしかり、　もっと大きな自然災害やテロ、戦争が起き、例えば、油の価格が１ℓあたり、２００円、３００円にまで高騰し、油の供給が完全に止まってしまったら、果たして今の文明が将来も維持していけるのか、現代文明の足腰の弱さを痛感しました。人間が最高条件を求め過ぎたために、文明の足腰がもろくなってしまったのでしょうね。

宮脇　その通りです。戦後、会社も役所も、ちょっと頭が出たらすぐ押さえて横並び、縦割りの人事管理をしてきました。経済がどんどん発展している時は、部下に「規格品」を置いておけばトップは居眠りをしていてもうまくいっていたわけです。しかし、バブルがはじけて 20 年近くたった今も、困難に対応できるエネルギーを持った人材が中央政府にも地方自治体にも、企業にも出てきていません。戦後の規格品づくりの教育や人事管理の影響が暗い影を落としています。緑の管理も、人事管理も、伸びてきたものは、伸ばし、頭は切らないでいただきたいですね。

ゲシュタルトの祈り　　H21.2.23

ドイツの精神医学者、フレデリック・Ｓ・パールズ(1893～1970)の詩

私は私のために生き、あなたはあなたのために生きる。
私はあなたの期待に応えて行動するためにこの世に在るのではない。
そしてあなたも、私の期待に応えて行動するためにこの世に在るのではない。
もしも縁があって、私たちが出会えたのならそれは素晴らしいことだ。
出会えなくても、それもまた素晴らしいこと。

訳

私は私のことをします。ですから、あなたはあなたのことをして下さい。私は、あなたの期待に添うために生きているのではありません。そして、あなたもまた、私の期待に添うために生きているのではありません。あなたはあなた、私は私です。でも、私たちの心が、たまたま触れ合うことがあったのなら、どんなに素敵なことでしょう。でも、もしも心が通わなかったとしても、それはそれで仕方のないことではないですか。(何故なら、私とあなたは、独立した別の存在なのですから…)

この祈りはドイツの放浪の精神科医と言われ、半分聖人、半分ルンペンとも呼ばれた、フレデリック・S・パールズによって提唱された詩である。他者へのしがみつき、他者を操縦しようとする努力を未成熟の兆候として徹底的に排除し、自立、自律性、自己責任の確立を目標とした。そのために、「今、ここ」の気づきの「体験」の重要性を主張した。それは頭で考える観念論的な体系化を否定し、「今、ここ」で直感的につかむものである。ゲシュタルトとは「全体性」または「全体のかたち」ということである。

＃　ゲシュタルトのモットーである「**私は私**」ということは**利己主義ということではない**。自主性の確立ということであり、利己主義や孤立無援とは違う。自分が自分であるということは、必要なことを他者に依頼することや、自発的に他者を愛することを含む。しかし、この場合の「愛」とは「しがみつき」ではなく、「私は私」という成熟を目ざしていく。人間の成熟性というのは他者が思うように動かないという欲求不満の状態の時、よく観察できる。このような場合、成熟した人は自分の能力の限界をよく受容して、いさぎよくあきらめるか、実現可能な方策を探る。未成熟な人は怒ったり、悲しんだり、あわてたり、ぐちをこぼしたりする。そして、子供のように、悲しそうな顔をしたり、不安がったり、同情を引こうと事実以上のことをいう。

＃　人間が生きていく上で言葉は重要な役割を占めるが、また言葉ほど頼りにならないものはない。例えば、怒っている生徒に、先生が「お前怒っているね」と聞く、生徒は「いいえ」と答えるが、「怒っている」という感じは全体像として、誰が見ても明

白である。そして怒っているのは昨日でもなく、明日でもなく、5 分前でもなく、5 分後でもなく、「今、ここ」で言葉に関係なく、存在していることを確認していく。

＃　「～したい」という人間と「～するべき」という人間では本質的な違いがある。「～したい」は自分が確立している。「～するべき」は自分以外のものに縛られている。

＃　「なぜ」という質問は相手に想像の答えを強いる。子供が窓ガラスを割ったとする。理由をいくら述べても大して役に立たない。割れたものは割れたのである。そこで、「なぜ」を「どのように」におきかえてみる。「どのようにしてそれは起こったか」という質問には事実が返ってくる。

＃　「～できない」という言葉を嫌う。「～できない」という語は責任をとらないことの表明である。大部分の「～できない」は「～したくない」と表せば自己責任が明確になる。

1　今に生きる。過去や未来でなく現在に関心をもつ。
2　ここに生きる。眼の前にないものより、眼の前に存在するものをとり扱う。
3　想像することをやめる。現実を体験する。
4　不必要な考えをやめる。むしろ、直接味わったり見たりする。
5　他の人を操縦したり、説明したり、正当化したり、審判しないで、ありのままの自分を表現する。
6　快楽と同じように、不愉快さや苦痛を受け入れる。
7　自分自身のもの以外のいかなる指図や指示を受け入れない。偶像礼拝をしない。
8　自分の行動、感情、思考については完全に自分で責任をとる。
9　今のまま、ありのままの自分であることに徹する。

人生、主体的に生きていけたら素晴らしいことだと思います。そこには自立性や創造力があり、自分の考えで動き自分の行動や感情にも責任がもてるのではないでしょうか。

自分を大切にし、大切な誰かも尊重する。考えの違いを赦せなくなるのではなく、そうゆう考え方もあるんだなと思うことができたら、もっとお互いに分かり合えたり、話し合えたりできるかもしれません。

自分と他者との違いを認めたり、受け入れることができれば、差別やいじめはなくなるかもしれません。

ゲシュタルトの祈りを読んで私は、自他の尊重、他者と自分との違いを受け入れたり、認めたりすることの大切さを感じます。

死にたいほどの無理をして誰かの期待に添う必要はないと思うし、自分の人生を変えられるのは自分だけだと思います。　「今・ここ」からが未来へのスタートです。